

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02210

研究課題名（和文）批判的リテラシーを形成する授業・教育実践の教育方法学的検討

研究課題名（英文）Research on the educational methods for developing critical literacy education

研究代表者

黒谷 和志（KUROTANI, Kazushi）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：40360961

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、主としてバスケス（Vasquez, V.）が初等教育段階の教師として展開した教育実践の記録を教師としてのライフヒストリーを視野に入れながら分析することを通して、批判的リテラシー教育を展開するための教育方法について検討した。

バスケスの教育実践には、子どもの生活や生活の中で出会うテキストに対する子どもの問いや気づきを実践の契機とする、生活の中にある社会的課題に取り組む教育実践を言語教育としての批判的リテラシー教育の視点から構想する、「学習の軌跡（Audit Trail）」を制作することによって「偶発的に展開する」諸実践間に連関をつくり出す、といった特徴があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

知識基盤社会に求められるリテラシーは、実生活で直面する課題解決に活かされる「機能性」とともに、言葉やシンボルを媒介して構成される世界やテキストを問い直す「批判性」を有することが求められている。

日本においても国外の批判的リテラシー教育の研究動向に着目し、その理論的・実践的な解明が進められてきたが、授業・教育実践を展開するための具体的な教育方法に焦点を当てた研究の蓄積が求められている。本研究では、批判的リテラシー教育に関わる国内外の実践記録を分析することを通して、子どもの生活と結合した批判的リテラシー教育が、授業・教育実践としていかに展開されるのかを検討した点に、学術的、社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this research, I explored the educational methods for developing critical literacy education. I mainly analyzed the practice records of critical literacy education which Vasquez developed, taking Vasquez's life history as a teacher into consideration.

I showed clearly that there are the following features in Vasquez's educational practices. (1) Based on children's questions about their lives or the texts which they met in their lives, Vasquez created the space for critical literacy education in their classroom. (2) Vasquez developed the educational practices in which children investigated the social justice issues in their lives from the viewpoint of the critical literacy education as language education. (3) Vasquez made connection among some classroom inquiries into the incidental unfolding of social issues in the lives of her students by creating the "Audit Trail" with them.

研究分野：教育方法学

キーワード：批判的リテラシー教育 批判的リテラシー 教育方法 学習の軌跡（Audit Trail）

1. 研究開始当初の背景

グローバル化や高度に情報化する社会構造の変化に応じて、OECD においても、従来の「読み書き能力」としてのリテラシーから、知識や技能を活用し実生活の場面で直面する課題を解決する資質・能力としてリテラシー概念を捉え直している。とりわけ、PISA 調査のリテラシー概念は、実生活で活用されるリテラシーの「機能性」を重要視する点で、機能的リテラシー論の研究潮流に位置づきながらも、持続可能な社会の形成のために、学校教育における批判的リテラシーの育成を求めるものとして、その重要性が指摘されてきた（樋口、2010）。

日本における批判的リテラシー教育に関する研究は、国外の研究動向に着目し、その理論的・実践的な検討がおこなわれているものの（竹川、2010）、授業・教育実践レベルでの具体的な教育方法に焦点化した研究は少なく、批判的リテラシー教育が授業・教育実践としていかに展開されているのかについては、更なる研究の蓄積が求められている。

また、批判的リテラシー論を授業・教育実践として展開していく際には、授業・教育実践と子どもの生活とをどのように結合させていくのかを明らかにしていくことも重要である。批判的リテラシー論は、子どもたちの主権者性を育む社会参加論としての特徴をもち、子どもたちが当事者として生活現実の再構築に関与する授業・教育実践が構想されてきたからである。

そこで本研究では、批判的リテラシー教育の国内外の研究動向に着目し、批判的リテラシーの理論的特質について明らかにするとともに、特に、批判的リテラシーの形成を追求する授業・教育実践が、どのような教育方法によって展開されるのかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究の目的

本研究は、批判的リテラシー教育を構想・展開する国外のいくつかの主要な研究動向や国内の「批判的な学び」の実践動向に着目して教育実践記録を収集し、授業・教育実践と子どもの生活とをどのように結合させていくのかにも着目しながらそれらを分析することを通して、批判的リテラシーを形成する授業・教育実践を構想・展開していくための教育方法について明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

批判的リテラシー教育を構想・展開してきた国外の実践研究として、本研究では主にバスケス（Vasquez, V.）の研究に着目した。バスケスは、幼児期の子どもたちを対象にした批判的リテラシー教育を展開した草分け的な実践家の一人として注目され（Comber, 2013）、また、教師としてバスケスが展開した教育実践は、カナダの公的なカリキュラムの中に批判的リテラシー教育を位置づけることに貢献した教育実践として注目されてきた（Brownell, Walkland, & Simon, 2022, p. 145）。

バスケスは、批判的リテラシー教育に関わる自身の実践記録を数多く公表しているとともに、初等教育段階の教師から大学教員へと移行した後も、批判的リテラシー教育について探究を続けている。本研究ではその中でも特に、1993年から1997年頃までの間に、初等教育段階の教師として批判的リテラシー教育の展開に携わったバスケスの実践記録を分析の対象とした。その際、バスケスが展開した各実践記録をそれぞれ個別に検討してその特徴を明らかにするだけでなく、バスケス自らが綴っている教師としてのライフヒストリーを視野に入れながら、バスケスの教育実践がどのように発展していったのかについて検討した。

4. 研究成果

（1）批判的リテラシー教育を支える理論的枠組み

①リテラシー教育にかかわる3つの理論的枠組み

バスケスはいくつかの著作の中で、自身がリテラシー教育を構想する際に参照している理論的枠組みがいくつか存在すると述べている。大きく3つの研究動向が示されている（Vasquez et al., 2004/Vasquez, 2017）。まず第一に、「記号読解の実践」、「テキストに参加する機会を提供する実践」、「テキストを使用するための実践」、「テキストを批判的に分析するための空間をつくり出す実践」からなるルークとフリーボディ（Luke, A. & Freebody, P.）によって提起された「4つのリソースモデル」である。第二に、「言語を学ぶ」、「言語について学ぶ」、「言語を通して学ぶ」、「批評のために言語を使うことを学ぶ」という4つの視点からリテラシー教育を構想するハースト（Harste, J. C.）による「ハリディ・プラス・モデル」と呼ばれるものである。第三に、「支配」、「多様性」、「アクセス」、「デザイン」という4つの鍵となる概念と、それぞれの概念の相互関連性において構想されるジャンクス（Janks, H.）の「批判的リテラシーの統合モデル」で

ある。

これらのモデルを参照することを通して、子どもたちがテキストにアクセスすることを可能とするための基本的な知識や技能を子どもたちが獲得するとともに、ある特定のテーマを探求する社会的実践としてのリテラシーや、テキストを批判的に読み、それをオルタナティブな視点から再構築していく批判的リテラシーの次元をリテラシー教育の中に位置づけている。

② バスケスの批判的リテラシー論の特徴

バスケスは、テキストや言語行為が有する次のような特徴を踏まえ、批判的リテラシーを捉えている (Vasquez, 2014a, pp. 7-8/Vasquez, 2017, pp. 3-5)。

- ・テキストは社会的に構成されたものであるがゆえに、テキストは決して中立的ではない。それゆえ、テキストが構成されていく際にはその過程で排除されていく視点がある。
- ・読み手がテキストをどのように読むかも中立的ではない。読み手は生活の中で身につけていく「文化的なモデル」を通して読み書きするがゆえに、読み手自身がどのようなものの見方に依拠して読み書きをしているのかを問い直す必要がある。
- ・テキストは、それを読む者に「特定の存在の仕方、行い方、話し方、考え方を提示」することを通して、読み手のアイデンティティ形成にも作用する。
- ・テキストが社会的に構成されるものであるならば、テキストは書き換えられうる。

また、バスケスによる批判的リテラシー教育の実践には、コンバー (Comber, B.) が提起した批判的リテラシー教育の 3 つの原理が内包されている。すなわち①言語を探究する者として生徒を位置づけ直す、②マイノリティの言語実践を尊重する、③テキストを問題化するという原理が、バスケスの教育実践の中に見られることも明らかになった (Larson & Marsh, 2015, p. 53/Vasquez, 2017, pp. 8-9)。

(2) 批判的リテラシー教育を展開するための教育方法の特徴

① 「日常のありふれたテキスト」を読みひらく

バスケスが記した実践記録の中には、「日常のありふれたテキスト (everyday texts)」を用いた実践が多く存在する。「日常のありふれたテキスト」とは、「日常生活の一部として話されたり、書かれたりしているテキスト」であり、「当たり前 (common) であるので、それらを注意深く注目しないテキスト」であると捉えられている (Vasquez, 2003, p. 19)。バスケスが構想する批判的リテラシー教育においては、子どもたちが系統的に批判的リテラシーを獲得するためのあらかじめパッケージ化された単元やテキストがあるというよりは、子どもたちの生活の中にあり、子どもたちが関心を寄せる「日常のありふれたテキスト」が、批判的リテラシー教育の教材として用いられている。

また、「日常のありふれたテキスト」の中には、言葉によって書き表されたテキストや描かれたテキストとともに、学校や教室など子どもたちが生活する公的な空間それ自体が読みひらかれるテキストとなる場合がある。

② 「日常のありふれたテキスト」に対する子どもの気づきや問いを実践の契機とする

バスケスの批判的リテラシー教育においては、「日常のありふれたテキスト」に対する子どもたちの問いや気づきが、批判的リテラシー教育のカリキュラムを展開する契機となっていた。

批判的リテラシー研究に出会うまでのバスケスは、ホール・ランゲージ・アプローチの原則に依拠したリテラシー教育を構想していたが、1990年代前半、オーストラリアで批判的リテラシー教育を理論的、実践的に探究していたコンバーやオブライアン (O'Brien, J.) と出会い、批判的リテラシー教育の実践的な探究を始めている (Vasquez, 2001b, 2014b, 2017)。

批判的リテラシー教育を探究するバスケスの初期の実践的な研究では、教室での子どもたちの会話や子どもが書いた絵や手紙などを収集し、その分析をおこなうことを通して、子どもたちの会話や作品の中には、子どもたちが置かれた生活現実を問題化する抵抗の声があることを見いだしている (Vasquez, 2001a)。バスケスはこのような分析を通して、子どもたちの気づきや問いの中に、批判的リテラシー教育の空間を教室につくり出す契機を見いだしていた。

③ 批判的リテラシー教育を子どもたちが生きる世界への参加と結合させる

1) 社会的課題に取り組む教育実践を言語教育としての批判的リテラシー教育の視点から構想していく

バスケスの批判的リテラシー教育は、子どもたちの生活やその中にあるテキストに対する子どもたちの問いや気づきを起点とし、学校文化、環境問題、ジェンダー、消費社会や大衆文化に焦点をあてた社会的課題に子どもたちが取り組む教育実践を、言語教育としての批判的リテラシー教育の視点から展開するものとなっている (Vasquez, 2014a)。

まず第一に、バスケスは、「日常のありふれたテキスト」の中にある言葉に付与された意味のシステムや言葉の使われ方を問題化しながら、子どもたちが生きる生活空間を再構築する活動に取り組む批判的リテラシーの実践を展開している。

第二に、同じ対象や同じテーマについて描かれた異なる二つのテキストを比較したり、テキストをリライトする活動を通して、「テキストは中立的に構成されるものではない」、「テキストは異なる視点から書き直されもする」ということを子どもたちが学びながら、環境問題について考える教育実践を展開している。

第三に、「日常のありふれたテキスト」に目を向け、その中にあるジェンダー・バイアスや企業のマーケティング戦略について話し合いながら、テキストがオーディエンスに「特定の存在の仕方、行い方、話し方、考え方を提示する」という性質をもつことを学んでいく教育実践を展開している。

2) 「書く」ことを通して子どもたちの市民的参加を促す

バスケスの実践は、子どもたちの生活の中にあるテキストや子どもたちの生活そのものをテキストとして批判的に読み解くだけではなく、子どもたちの生活の中にある問題や不平等の改善を求めて、要望書や手紙を「書く」という活動が位置づけられている。バスケスの教育実践において「書く」という活動は、子どもたちの生活の中にある社会的公正や不平等の改善に取り組むための社会的実践として状況づけられているとともに、社会的課題への子どもたちの参加（意見表明）を保障するものとなっている（Vasquez, 2014a）。

④「学習の軌跡(Audit Trail)」を制作し、批判的リテラシーの諸実践間に連関をつくり出す

バスケスが後半期に教師として実践した批判的リテラシー教育の特徴は、子どもたちとともに「学習の軌跡」をつくり出す点にあった。前半期のバスケスの教育実践においても、子どもの生活現実の中にある環境問題、ジェンダー、差異と多様性、世代の平等などをテーマに、教室の中に批判的リテラシーを実践する空間をつくり出していった。しかし、バスケスの前半期の教育実践は、子どもたちとつくり出したある実践と別のある実践との連関が追求されておらず、それぞれが独立したものとなっていた。その点に自身の実践上の課題を見出したバスケスは、教室の中で展開されていく批判的リテラシーの諸実践間に関連性を持たせ、年間を通して教室の中に批判的リテラシーの実践を位置づけていくことを追求していた（Vasquez, 2014b, pp. 179-180）。

この実践課題を追求するためにバスケスが依拠したものが、「学習の軌跡」の制作であった。「学習の軌跡」とは、子どもたちが自分たちの生きる世界を批判的に探究した過程を教室の壁に表現していくものであり、そこには、子どもたちが批判的リテラシーの実践をおこなっていく過程で読み解いた絵本の表紙や資料の切り抜き、子どもたちから生まれた問い、子どもたちが作成した手紙や絵、子どもたちの語りの記録などが掲示された。また、「学習の軌跡」には、子どもたちが取り組んだ諸活動間に共通するテーマや、諸活動間の連関、さらにはあるテーマについての探求から生成した別の課題などが書き込まれていく。バスケスは、子どもたちと「学習の軌跡」を制作していくことを通して、学習や思考の足跡を辿り直し、子どもたちの活動を子どもたちと理論化していくことを試みている（Vasquez, 2014a）。

バスケスが構想・展開してきた批判的リテラシー教育は、その当初から子どもたちが生きる生活現実と緊密に結びつく形で構想されており、子どもたちの生活やその中で出会うテキストに対して子どもたちから生まれてくる気づきや問いから「偶発的に展開する（incidental unfolding）」ような局所的な実践としての特徴を有していた。しかし、そのような特徴をもつバスケスの教育実践は、その都度の個別の教育実践に陥ってしまったり、子どもたちから偶発的に生まれる気づきや問いを待たなければ展開しないという課題を有していた。バスケスが子どもたちと取り組んだ「学習の軌跡」の制作は、その陥穽から抜け出すためのものである。批判的リテラシーの実践に取り組んだ子どもたちの経験が「学習の軌跡」に表現され、子どもたちが「学習の軌跡」に立ち戻ることによって、「学習の軌跡」を足場にしながら子どもたちは新たなテキストに対する気づきや問いを生成し、新たな批判的リテラシーの実践が生み出されている。その意味で「学習の軌跡」は、「偶発的に展開する」批判的リテラシーの実践の連鎖をつくり出し、教室の中に年間を通して批判的リテラシー教育を位置づけていくための「しかけ」となっていた。

(3) 各教科の授業の中で批判的リテラシー教育を展開する

研究職についてからのバスケスは、ライティングやリーディングの授業の中で実践される批判的リテラシー教育だけではなく、各教科の授業の中で展開される批判的リテラシー教育について探究している。それらの論考の中では、各教科の授業の中でジェンダーや環境問題といった社会的課題を直接のテーマとした教育実践が必ずおこなわれるわけではないが、各教科の中で取り扱われる既存の教材に対する子どもの問いや気づきをもとに教材を問題化し、その教材を子どもたちが再構成する教育実践が構想されている。各教科の授業に批判的リテラシー教育を位置づける場合、子どもたちがその教科の教科内容をいかに習得するかという視点とともに、テキストが社会的に構成されていること、またそれはデザインし直すこともできるといった批判的リテラシーに求められる視座を、その授業を通して子どもたちが学んでいく教育実践として構想されている（Vasquez, 2017, pp. 69-80）。

(4) バスケスの批判的リテラシー教育の検討に関わる残された課題

バスケスが教師として展開した教育実践や研究職に就いてからのバスケスの諸論考を対象に

した研究に関わっては、以下の点が課題として残った。

第一に、バスケスが教師として実践した批判的リテラシー教育に関わって、バスケスが「義務づけられたカリキュラム (mandated curriculum)」とどのように交渉しながら、批判的リテラシー教育を実践する空間を教室の中に創出したのかを検討することである。

第二に、研究職に就いてからのバスケスの研究には、批判的リテラシー教育をテクノロジーの使用との関連で構想しようとする研究や各教科の授業の中で展開することを視野に入れた研究が存在するが、それらについては十分に検討できなかった。批判的リテラシー教育を視点として教室のカリキュラム全体を構想することに関心を持っていたバスケスは、その後、学校教育の中に批判的リテラシー教育を実践する領域をどのように拡張しようとしていたのかについて検討することも今後の課題である。

(5) 生活指導実践における「批判的な学び」

生活指導研究において、批判的リテラシー論の礎を築いたフレイレの思想は、竹内常一によって子どもの権利条約やユネスコ学習権宣言等とともに摂取され、社会へと批判的、創造的に参加していく主体として子どもたちをエンパワメントしていく教育実践の必要性が提起されてきた(竹内、1992)。本研究では、そうした思想を引き継ぎ、知や現実を再定義する学びとして評価されてきた鈴木和夫の教育実践(鈴木、2005)を再検討した。

また、生活指導実践として展開される集団づくりでは、バスケスらによる批判的リテラシー教育と通底する教育実践が展開されている。集団づくりにおける自治とのかかわりでは、子どもたちとの対話・討論を通して、学校や教室の中に存在する「当たり前」を問い直し、それらを子どもたちと再定義していく教育実践が展開されている。また、集団づくりにおける子どもたちの関係づくりにかかわっては、子どもたちの囚われた(自明視された)世界や他者や自己の見え方を子どもたち自身が問い返していくことを通して、子どもたちが世界や他者との間にある境界を越境していく教育実践が展開されている。さらには、日常生活の中で子どもたちが発する言葉に着目し、子どもたちと対話・討論をおこないながら、その言葉がもつ意味のシステムを子どもたちと問い直ししていく教育実践も展開されていた。

<引用・参考文献>

- ① 鈴木和夫『子どもとつくる対話の教育—生活指導と授業』山吹書店、2005年。
- ② 竹内常一『いま、学校になにが問われているか—学校論へのいざない』明治図書、1992年。
- ③ 竹川慎哉『批判的リテラシーの教育—オーストラリア・アメリカにおける現実と課題』明石書店、2010年。
- ④ 樋口とみ子「リテラシー概念の展開—機能的リテラシーと批判的リテラシー」松下佳代編著『〈新しい能力〉は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房、2010年。
- ⑤ Brownell, C. J., Walkland, T., & Simon, R. (2022). Critical Literacies in Canada: Past, Current, and Future Directions. In Pandya, J. Z., Mora, R. A., Alford, J. H., Golden, N. A., & Roock, R. S. (Eds.), *The Handbook of Critical Literacies*. Routledge.
- ⑥ Comber, B. (2013). Critical Literacy in the Early Years: Emergence and Sustenance in an Age of Accountability. In Larson, J., & Marsh, J. (Eds.), *The SAGE Handbook of Early Childhood Literacy (Second Edition)*. Sage.
- ⑦ Larson, J., & Marsh, J. (2015). *Making Literacy Real: Theories and Practices for Learning and Teaching (Second Edition)*. SAGE.
- ⑧ Vasquez, V. (2001a). Classroom Inquiry into the Incidental Unfolding of Social Justice Issues: Seeking Out Possibilities in the Lives of Learners. In Boran, S., & Comber, B. (Eds.), *Critiquing Whole Language and Classroom Inquiry*. National Council of Teachers of English.
- ⑨ Vasquez, V. (2001b). Constructing a Critical Curriculum with Young Children. In Comber, B., & Simpson, A. (Eds.), *Negotiating Critical Literacies in Classrooms*. Lawrence Erlbaum Associates.
- ⑩ Vasquez, V. (2003). Pairing Everyday Texts with Texts Written for Children. In Vasquez, V. (Ed.), *Getting Beyond "I Like the Book": Creating Space for Critical Literacy in K-6 Classrooms*. International Reading Association.
- ⑪ Vasquez, V., Egawa, K. A., Harste, J. C., & Thompson, R. D. (2004). Introduction. In Vasquez, V., Egawa, K. A., Harste, J. C., & Thompson, R. D. (Eds.), *Literacy as Social Practice: Primary Voices K-6*. National Council of Teachers of English.
- ⑫ Vasquez, V. (2014a). *Negotiating Critical Literacies with Young Children (10th Anniversary Edition)*. Routledge.
- ⑬ Vasquez, V. (2014b). Inquiry into the Incidental Unfolding of Social Justice Issues: 20 Years of Seeking Out Possibilities for Critical Literacies. In Pandya, J. Z., & Ávila, J. (Eds.), *Moving Critical Literacies Forward*. Routledge.
- ⑭ Vasquez, V. (2017). *Critical Literacy: Across the K-6 Curriculum*. Routledge.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 黒谷和志	4. 巻 第68巻
2. 論文標題 「批判的リテラシー教育における教育実践の教育方法的検討 - V. バスキスの論考を手がかりとして - 」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『教育学研究紀要』（中国四国教育学会編）	6. 最初と最後の頁 61-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒谷和志	4. 巻 第27号
2. 論文標題 「教室の中に『子どもたちとともに生きる世界』を築き出す - 第54回道生研大会基調提案の検討を通じて - 」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『北海道の生活指導』（全国生活指導研究協議会北海道支部編）	6. 最初と最後の頁 6-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒谷和志	4. 巻 110号
2. 論文標題 「フレイレのリテラシー論が拓く学校教育の地平」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『季刊 人間と教育』（民主教育研究所編）	6. 最初と最後の頁 34-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒谷和志	4. 巻 第26号
2. 論文標題 「教室の中に他者とともに生きる世界を広げる学びと活動をつくり出す」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『北海道の生活指導』（全国生活指導研究協議会北海道支部編）	6. 最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒谷和志	4. 巻 No.137 (リニューアル第6号)
2. 論文標題 「学校・学級の中に子どもたちの声が語り出される場と関係を取り戻す」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『みんきょう』（北海道民間教育研究団体連絡協議会編）	6. 最初と最後の頁 28-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒谷和志	4. 巻 第75巻第1号
2. 論文標題 「V.バスケスによる批判的リテラシー教育の構想と展開」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『北海道教育大学紀要（基礎研究編）』（北海道教育大学編）	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 黒谷和志
2. 発表標題 批判的リテラシー教育における教育実践の教育方法学的検討 - V.バスケスの論考を手がかりとして -
3. 学会等名 中国四国教育学会第74回大会（自由研究発表）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 黒谷和志
2. 発表標題 V.バスケスによる批判的リテラシー教育の構想と展開
3. 学会等名 日本教育方法学会第59回大会（自由研究14）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

・黒谷和志「活動と対話を通して子どもたちの声を聴きとり、子どもたちのつながりをつくり出す」（広生研フロンティア学習会）（広島県生活指導研究協議会主催 / 2022年2月19日 / オンライン実施）
・黒谷和志「多様な他者の声と出会う学び」全国生活指導研究協議会北海道支部編「会員通信 秋冬号」、2022年12月（『北海道の生活指導』第27号（全国生活指導研究協議会北海道支部編、2023年、136頁）に所収）

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------